



Title	〈書評〉 佐藤将之著 『荀子—礼治思想の淵源与戦国諸子之研究』
Author(s)	工藤, 卓司
Citation	中国研究集刊. 2014, 59, p. 125-137
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58679
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評・・佐藤将之著

『荀子——礼治思想的淵源与戦国諸子之研究』

工藤卓司

一、はじめに

本稿で紹介する『荀子——礼治思想的淵源与戦国諸子之研究』の作者佐藤将之氏は特異な学者だと言つてよい。まずはその経歴からして日本の中国思想研究者とは毛並みを異にする。佐藤氏について読者の中には余りご存知でない方もおられると思うので、該書の書評を行うに先立って、ここで作者について簡単に紹介しておきたい。

佐藤氏は一九六五年神奈川県川崎市の生まれである。青山学院大学政経学部を卒業後、台湾の国立台湾大学及

び韓国のソウル大学の修士課程（共に政治学）を経て、オランダのライデン大学にて哲学博士を取得、二〇〇二年より国立台湾大学哲学系助理教授、現在は副教授として後進の指導、及び御自身の学術研鑽・著述活動に余念の無い日々を送っておられる。こうした略歴を御覧になつて一目瞭然となるのは、佐藤氏の出自の特殊と語学能力であろう。氏が日本の多くの中国哲学思想研究者とは異なり、政治学から出発している点は、氏の学問を語る上で欠かす事のできない特色である。また、早くから台湾・韓国、そしてオランダにて学業に励まれた事で、中国語はもとより、韓国語や英語にも精通されている事も氏の学問形成上、大きな特色だと言える。アジアの学

者のみならず、欧米の学者とも親交厚く、世界を股にかけて学術活動に参与されるばかりか、近年ではアメリカ・ハーバード大学でのサバティカルを経験されるなど、益々活動の幅を広げておられるのは、氏の学問への強烈な意思や好奇心とも相俟って、その言語能力に因る所が大きい様に思える。こうした二特色は、氏の学問上の視野の広さを培う上で重要な要素となつていと言つてよいだろう。

さて、ではそうして築かれてきた学術的営為には如何なるものがあるのか。続いて氏の主要な研究成果について述べてみたいと思う。該書の「作者簡介」には主要研究領域として三つの分野が記されている。「先秦の政治観念」、「荀子哲学」及び「東アジア比較思想史」というのがそれである。

まず氏の先秦政治観念研究は、主として「変化」「誠」「忠」「信」「礼」「兼」といった概念を中心として展開されてきた^(注1)。その成果の一つとして、近年刊行された專著に『中国古代的「忠」論研究』がある^(注2)。この著作は、中国・日本・韓国及び欧米の学者における「忠」概念研究の成果について詳論しながら、春秋時代から戦国時代前期の政治思想において、道徳的動機を主内容とするものであった「忠」と「忠信」とが、道家や稷下の

思想家の批判を受けて、個人的利益を主な実践動機とするものへと移り変わり、その後、『荀子』や『呂氏春秋』が改めて国家運営上の積極的価値を認め、『韓非子』も一方では稷下の反忠論を引継ぎながらも、他方では「忠臣」の国家安定における役割を認める事になったと指摘している。本書は先秦における「忠」論の変遷を総合的に明らかにしたという点で非常に価値ある一冊だと言つてよい。

また、こうした先秦政治観念の研究が、氏の荀子哲学研究と無関係でない事は、選択された「変化」「誠」「忠」「信」「礼」「兼」といった語彙が荀子思想において特に重要な概念である事から明らかであろう。二〇〇一年五月にライデン大学に提出された博士学位請求論文が『Confucian State and Society of Li: A Study on the Political Thought of Xun Zi』であり^(注3)、後に『The Confucian Quest for Order: The Origin and Formation of Xun Zi's Political Thought』として公刊されている^(注4)。それ以後、荀子研究が氏の十八番となつている。とりわけ膨大な量に及ぶ日本の明治期以降の先行研究について整理を行い^(注5)、中国・台湾・韓国といった地域の研究成果のみならず、更に広く欧米の学者の著述にも目を向けて、荀子「哲学」の研究を続けておられる点

は、世界中の多くの研究者の高い評価を獲得しており、今後、まとまった成果の刊行が待たれる所である。

そして、最後は東アジア比較思想史についてである。この点は正しく、日本人でありながら台湾や韓国でも多感な学生時代を過ごされた氏の直接的体験が活かされる分野であろう。近年は『荀子』のみならず、『墨子』や『韓非子』、『中庸』研究における東アジア各国での様態についても精力的に論及されている^(注6)。

これ以外にも氏は若手研究者の為に多くの援助をされているが、本書評では割愛させていただく。

さて、本稿で僭越ながらも紹介させていただくのは、氏にとっては三冊目の専著となった『荀子——礼治思想的淵源与戦国諸子之研究』である^(注7)。氏の十八年にも及ぶ荀子哲学研究の一環である事は、その題名からして明白であろう。では、その内容とは如何なるものなのだろうか。

二、内容

まずは目次(小項目については省略した)を掲げる。

本書は自序(書前)、附録・主要参考書目・索引(人名索引・詞語索引・引用文献索引)・跋(以上は書後)を

除くと以下の体裁を採っている。

導論

第一節 本研究的縁起与目的

第二節 過去対「礼」思想的研究暨其与《荀子》礼論的關係

第三節 《荀子》礼治政治思想的形成与構造》の主要

観点与課題

第四節 本書の結構

第一章 統治天下人民之帝王

…《墨子》的「兼」与《荀子》

序言

第一節 〈兼愛〉の主題是否為「兼愛」?

第二節 戦国早期文献中の「兼」

第三節 墨家的「兼」与「兼愛」…治理「天下」之君徳

第四節 「荀子」的「兼」

小結

第二章 天人之間的帝王

…《莊子》的「道徳」与《荀子》

序言

第一節 過去対《荀子》与「道家」思想關係之研究

第二節 《莊子》和《荀子》之間的思想關係与「道

「德」

第三節 《史記》中的「道德」和司馬遷對莊荀思想
的評論

第四節 《論語》、《孟子》及《郭店老子》中的「德」

概念

第五節 《莊子》「德」概念之特色

第六節 《荀子》「德」和「道德」概念的特質與《莊
子》

附論 定州竹簡《文子》「道德」概念的思想特質

小結

第三章 教化人民的帝王

序言 …《管子》「經言」諸篇的「禮論」與《荀子》

第一節

過去研究對現本《管子》及其與《荀子》之
間的思想關係之主要見解與問題

第二節 創造「能自律自規」的人民…《牧民》的思
想特質與《荀子》

第三節 君王的境界與條件…《形勢》的思想特質與
《荀子》

第四節 人民的管理與教化…《權修》的政治思想特
質與《荀子》

第五節

從「一國之制」到「天下之制」…《立政》的

思想特質與《荀子》

第六節 作為達成資源的公正分配之朝廷…《乘馬》
的思想特質與《荀子》

小結

第四章 具備神明的帝王

序言 …《管子》諸篇中的禮論與《荀子》

第一節

《管子》禮論的整體特色

第二節 《管子》中《君臣上》和《君臣下》的政治
思想與《荀子》的禮治思想

小結

第五章 效法天地秩序和體現文明秩序的帝王

序言 …《呂氏春秋》的「理義」與《荀子》的「禮義」

第一節

過去《呂氏春秋》和《荀子》「理」的研究
評述

第二節 《呂氏春秋》的「理」和「理義」

第三節 《荀子》的「理」概念與「禮義」

小結

第六章 《荀子》的「性」論與《韓非子》的人論

序言

第一節 當代學者針對荀子與韓非子之間關係的觀點

第二節 《荀子》与《韓非子》的「性」概念

第三節 《荀子》及《韓非子》的「人」觀

第四節 韓非「人趨利避害」的思想来源

小結

結論

一、「礼治国家」漢朝的形成

二、本書研究所獲得的若干見解

三、《荀子》礼治論的思想意義

紙幅の都合上、各章各節各項について詳論する事はできない。そこで、本書評では主として結論の「二」を利用しつつ、補足説明を雑えながら内容を紹介する事したい。

本書の主要な課題は四つである。(一)荀子は如何にして墨家的要素と道家的要素(特に『莊子』)の思想とを彼自身の「礼治」理論の中へと統合したのか。(二)『管子』の礼論或いは礼制論は『荀子』礼論の原型の一つではないか。互いの異同や影響関係はどうなのか。(三)『呂氏春秋』と『荀子』はそれぞれ「理義」と「礼義」によってどの様な秩序性や合理性をつくり上げようとしたのか。(四)『荀子』と『韓非子』の人間觀において、理論的必然的な継承関係を見出し得るや否や。こうした問題の検討を通じて、著者は『荀子』礼論の綜合性

という特質を明らかにしようとする。

課題の第一は、換言すれば、荀子が如何にして「礼」概念によってそれ以前の様々な主張を整合し、より完全で実行性を伴った政治理論へと昇華させたのかという問題でもある。著者は『史記』孟子荀卿列伝の「(荀子)推儒墨道德之行事興壞」に注目し、司馬遷が荀子を儒・墨・道德三家の綜合として捉えていたと指摘する。そこで本書第一章で分析の対象となるのは、墨家と『荀子』との関係である。『韓非子』五蠹「今儒墨皆稱先王兼愛天下」によれば、戦国末年の儒墨が共に「兼愛」を唱えていた事がわかる。実は『荀子』思想中には「兼」「兼愛」の思想が多く含まれており、著者はそうした「兼」の用例から、荀子が墨家の「兼」「愛」「義」「利」といった主要な価値概念を自身の政治社会理論の中に取り入れて統合している事を発見する。また、荀子の「兼」の特色について、統治行為の総攬、「帝王の術」としての主要な方法、具体性と理論化の三点を挙げ、墨子が「天」に依拠するのみだった価値体系を人の能力に依る人間的秩序へと移行させ、より具体的な実践方法を提示すると共に、墨家では「尚賢」による外なかつた人の階層間での移動を「礼」に依る事で可能にしたとしている。こうした分析結果が示すのは、『荀子』が『墨子』

思想を吸収したという可能性を示すものであり、文献形成の点でも一見解を提示するのである。

次に第二章では「道徳」が主題である。著者は先秦文献において「道徳」という概念が最も多く見られるのが『莊子』、その次が『荀子』である事に着目し、『莊子』と『荀子』の思想的関係を明らかにして、『荀子』がどの様に戦国中後期の道家思想を摂取したのか探ろうとする。著者はまず『論語』『孟子』及び郭店『老子』に見える「徳」概念が個人（統治者）の倫理的状态であるのに対し、今本『老子』や『莊子』中のそれは「天地の生成能力」を指していると指摘する。そして『荀子』の「徳」論をその両者の総合として捉え、とりわけ「積徳」「徳操」「天徳」の分析を通じて『莊子』との親近性を明らかにしている。また著者に拠れば、『莊子』では士や統治者は「道徳」に依拠する事で最終的価値としての「天」へと至るのだが、それは人が到達し得る最高の境地「聖人」となる事でもあった。しかし、『荀子』はそうした「天」へと至るための方法としての「道徳」を、「人」の世界へと引き降ろし、「修礼」によって到達する事のできる境地へと転化する。著者はそこに『荀子』の特色を見るのである。

第三章と第四章で検討するのは、本書の課題の第一、

戦国斉国に元来存在したであろう礼論と『荀子』礼治論との関係についてであり、『管子』と『荀子』の影響関係について明らかにする事で、荀子の戦国斉学の伝統における思想的意義について考察しようとする。まず第三章では『管子』『経言』諸篇について分析し、豊富な礼論をそこに見出している。そうした「経言」における「礼」は、最も重要な治国方法であると共に倫理的価値でもあったと言う。「経言」の礼論が「人民の管理」に最終目標を置くのに対し、『荀子』の「礼」の主要機能は「人民の教化」である点、また、『荀子』の「礼」及び「礼義」が本国の教化を意味するのみならず、延いては全天下全人類の教化を促すものである点で、『管子』と『荀子』とは異なると指摘するものの、小結では『管子』『経言』に現れる「礼」に関わる言論は、『荀子』『礼治』理論の主要な根拠の一つであったろう。この意味において、荀子もまた斉学における「礼」思想の継承者だったと言ってよい（頁一四六）と結んでいる。

続いて第四章では、まず『管子』全体に範囲を拡げて「礼」について分析し、続いて君臣上下篇の考察を行って、「礼」概念の抽象化、具体化、「国体」統合の鍵としての効果という三つの方向性が認められると指摘する。そして、『管子』に欠如する論点については『荀子』に

よる補足を認めながらも、「我々は『管子』の「礼論」の中に『荀子』「礼治」理論の主な思想的来源を見出す事ができる」(頁二六六)と述べている。著者は戦国儒家における「礼」思想発展という脈絡以外に、戦国中後期の斉国の「礼」が果たした役割や実例の中に、『荀子』礼治思想の主な思想的淵源を求めようとしているのだが、第三章及び第四章は、『管子』こそがその一つである事を論証しようとしているのである。

第三の課題は、『呂氏春秋』の「理」「理義」概念と『荀子』の礼論との比較、或いは両者間に存在するであろう思想的関係、とりわけ前者の総合性と後者が指向する秩序と合理性の関係を明らかにする事であったが、第五章がこの問題のために当てられている。著者は「理」と「理義」とが『呂氏春秋』思想の核心部分を占めており、その「理義」概念によって地上に「天—地—人」を一貫する秩序を構築しようとしたという事を明らかにした上で、『呂氏春秋』編纂時に呂不韋は黄老の学を中心として各家の思想を綜合する様指示したが、齊学的伝統を受け継ぐ実際の編集者は「理」「理義」によって全体を貫こうとしたのではないかと推測する。それに比して、『荀子』の「理」概念の特色は、全人類の「偽」を意味する「文理」という概念を提出し、それと「礼義」

概念との相補的作用を説いた事だと述べる。荀子が「理」の機能について述べる際最も注意を払ったのは、人は如何にしたら人類特有の倫理的文明秩序、即ち「文理」を実現できるのかという問題であり、荀子はそうした人類の文明的秩序を成すためには、一般の士人から国君・聖人まで「礼」「礼義」を実践しなければならないと考えていたと主張するのである。

第六章では第四の課題について論じ、『韓非子』の人間論が『荀子』性論の思想的系譜に属するものではない事を明らかにする。まず、著者は嘗ての論者の多くが「二人の思想家の共通点は韓非が荀子の学生だったという「史実」によって解釈でき、司馬遷の記載の正確性もまた二つの思想がよく似ているという印象によって「実証」される」(頁三三八)という循環論法に陥っていたと指摘し、それを断ち切るために、韓非が荀子の学生だったか否か、荀子と韓非の人性観の二点について再検討を行うのである。まず一点目については、先行研究を整理し、特に司馬遷が学問上の師承関係を言う場合は「(韓非)与李斯俱事荀卿」の様な「事」ではなく「師」「学」「受業」を用い、また韓非列伝に「其帰本於黄老」とある事を論拠の一つとして荀韓の師承関係を否定する大陸の学者張捏の研究を高く評価し、そうした研究は少

なくとも、「韓非が荀子の学生である」という主張が自明のものでは無い事を示し、従って、それによって韓非の思想が荀子に淵源すると論証できない事を明らかにしたと言う。続いて二点目については、『韓非子』における人の「性」が不変であるのに比して、『荀子』の場合には自覚的努力や「偽」によって変化するものであり、両者の人間観についても、『韓非子』が人の天分は異なるとするのに対して、荀子は人は生理上心理上皆同じだと考えていると論じている。確かに両者は共に「人が利益追求を重んじる」事を信じている、しかし、それは当時の思想家は皆そうだったのだと『商君書』や『管子』『呂氏春秋』を挙げながら論じ、かつ人とは我侏で、統治者はそうした天性を利用しなければならぬとする人間観の淵源を、慎到や田駢に求め、「韓非は全ての人類が同じで可塑性を具えている事を大前提とする荀子の人間観を撰取せず、直接「前期法家」及び稷下の学者の人間観とそうした人間観を利用した統治理論を整合した可能性が比較的高い」と述べ、「荀子の性論と韓非の人間観とは、直接的な影響関係は無いだろう」（頁二六〇）と結論づけるのである。

最後に結論ではまず二つの例を挙げて、漢朝を「礼治国家」と称す理由を説明し、『荀子』礼治論の大きな影

響力について示そうとする。その一つは叔孫通であり、もう一つは司馬遷『史記』礼書である。礼書の後段には『荀子』中の文字と重なる部分がある。そこで著者は「もし『史記』礼書の内容が漢朝礼治の理論的根拠を表すものとするならば、漢朝礼治の原理こそは『荀子』に由来すると推論する事ができる」（頁二六三）と述べている。続いて本書の論述をまとめた後、最後に『荀子』礼治思想と他文献の「礼」思想との相違、そして『荀子』礼治政治哲学の歴史的意義について言及する。まず著者は「礼」に関する言説をその論述目的や範囲・内容によって「礼論」・「礼制論」・「礼治論」の三種に分ける。「礼論」とは、個別の「礼」についての解釈や説明、及び「礼」の意義や重要性についての説明によって構成される言論を指すとする。また、「礼制論」は国家制度について考察解釈したもの、そして「礼治論」は、国家や社会の建設、さらには宇宙の法則といった秩序形成の原理的問題から「礼」の重要性について思考・論述を加えたものである。著者はこの「礼治論」に『荀子』の特色を見、その特質について、（一）「礼」概念を「治」概念を媒介とする事によって間接的に「道」と連結し、「礼」こそが秩序そのものだという観点をつくりあげた事、（二）「礼」が機能を発揮するのは宇宙論や本体論上

の領域ではなく、天地に対する、また社会や国家を構成する総体としての「人」の領域であった事を挙げている。そうして形成される秩序とは、倫理的法則（「義」と人類特有の文明的特質（「文理」）とによって打ち立てられなければならないものであったが、こうした『荀子』の礼治論を経て、「礼」は始めて「天地宇宙において全人類を貫き、理想的な生き方をかたちづくる法則」（頁二七三）という意義を持つ事になり、それこそが天下統一後、漢朝が最も必要とした「政治大綱」だったと言う。またそれのみならず、荀子の礼治論は一つの王朝や国家の枠組を超越する視野を備えていたために、全人類社会の歴史と生存方式をも含む事となり、「礼」の重要性は漢朝の滅亡後も消え去る事なく、東アジア知識人によって繰り返し語られていく事となったと述べる。ここに『荀子』思想の歴史的使命は「完成」された、というのが著者の主張である。

三、本書の価値と若干の問題点

最後に本書の学術的価値と問題とについて、若干の私見を附しておきたい。

著者は導論において前著『The Confucian Quest for

Order』には五つの問題点があると自ら指摘している。第一、「倫理的言説」や「分析的言説」の『荀子』に対する影響を考察した際に儒家言説のみを考察対象とし、墨家や『莊子』の影響についてほとんど触れていない。第二、中国古代礼論の変遷や『荀子』礼論の分析は行ったものの、荀子以前の様々な思想的文脈と『荀子』礼論との関係について明らかにできていない。第三、『管子』の礼論や礼治思想について部分的にしかり理解できておらず、その『荀子』との関係について述べていない。第四、齊学の影響を色濃く受けていると思われる『呂氏春秋』において「理」が最も重要な概念として扱われているが、それと『荀子』の「礼」との関係について専論する機会を得なかった。第五、『荀子』思想が実践倫理への強烈な意欲を表したものだとして強調したが、どうしてその中から『韓非子』の様な法家思想が生まれたのかについて十分に述べる事ができていない。

こうした問題を解決するため、前述した様に、本書は四つの課題を設けてそれぞれに課題を克服していく。著者本人も認めている様に、本書は『荀子』思想研究の「基礎」作業（自序、頁VIII）に過ぎないが、過去の研究の多くが『荀子』そのものの分析か、或いは他の諸子との比較を行ってはいっても一対一の比較に留まるのに対し

て、総合性という観点から、多対一の比較を通じて『荀子』中の多様な「礼」がどの様に戦国時代当時の様々な主張に対して総合的作用を發揮したのかを問ひ質し、またその総合性の思想的歴史的意義について考察を進め、『荀子』「礼」概念の淵源と発明の軌跡をたどろうとする著者の試みは、本書において一定の成功を収めたと言つてよい。尚且『荀子』思想研究に限らず、『墨子』『莊子』『管子』『呂氏春秋』『韓非子』、更には『文子』といたつたそれぞれの思想研究において、逆に『荀子』との比較を通じて新たな知見を齎し、より明確な説明を可能にしたという点でもその貢献は少なくないだろう。各論の冒頭で必ず先行研究を整理してそれぞれの得失を明らかにし、また、本書末尾には各種概念の用例を網羅した表が附載されているのも、後学の研究に大いに役立つものだといえる。

さて最後に誤字や表現の問題を除き、評者なりに若干の問題点を述べてみたい。

一点目は、本書全体としては多対一であるものの、各章では比較対象としての両文献が単線的な関係でしか考へられていない様に見受けられる部分がある事である。例えば、第五章では「理」について論じるに際して、『呂氏春秋』以外に『莊子』の用例についても言及して

いるが、同様に第二章においても『管子』中の八用例に触れてもよかつたのではないか。さすれば、より複線的且つ立体的に先秦の思想世界が見えてくる様に思へるし、所謂「齊学的伝統」に対する『荀子』思想の態度もより鮮明に見えてくるのではないか。

二点目は、『墨子』の「兼」字がその他の概念と通用すると述べて、兼愛下「兼即仁矣、義矣」から、著者は『墨子』における「兼」が「仁」「義」と同義だとしている(頁三九、四〇)が、この「兼」は「天下愛人而利人」「兼相愛交相利」を指すから、「兼」字がそのまま「仁」「義」字と同義であり、他概念と通用すると言へるかどうか、疑問に感じられる。また、この兼愛下の句が墨子批判者の発話中に見られる点も注意が必要であろう。こうした文字・概念・意味の対応が不適ではないかと思われる箇所も幾つか見られる。

また三点目は、「兼利」という語句について先秦文献には殆ど用例が無いと述べている(頁四九)が、『文子』道徳に「文子問徳。老子曰『畜之養之、遂之長之、兼利無損、与天地合、此之謂徳』とある。『文子』の成書について不明な点が多い事は第二章附論に述べられているが、後文で「墨家の「兼利」概念(頁五五)と断言するためにも、説明が必要だつたのではないかと思われる。

四点目は、「礼論」「礼制論」「礼治論」という三用語の相違が、結論になって漸く明確に示される事である。とりわけ「礼治」は著者にとって『荀子』思想を語る上で重要な概念である筈で、行論上先に提示してあると読者にとってはより明確に論旨を把握できるのではないかと思う。一例を示せば、第四章に「(『管子』) 版法解の作者は『礼』は社会的争乱を防ぐためにうち立てられたものだ」という殆ど『荀子』と同様の概念構造を用いて「云々(頁一五四)とあるが、三用語の説明を念頭に置いて読むと分かり易いだろう。

最後に、著者は『荀子』思想の「礼治国家」漢朝に対する影響について屢々触れており、結論では特に叔孫通と司馬遷を例としてこの点について論じているが、この両者が「漢朝」の「礼治」を代表する立場だと言い得るかという点はやはり説明が不足しているよう。叔孫通は著者の用語を借りれば「礼制論」に係るものであり、『史記』は司馬遷の個人的著述に過ぎないのではないか。そもそも漢朝、特に前漢を単純に礼治国家だと言えるだろうか。前漢宣帝は「漢家自有制度、本以霸王道雜之」と述べていた(『漢書』元帝紀)。仮にそうだとしても、その「礼」がどれ程『荀子』のものであったのか、或いは『荀子』のものだと認識されていたのか、評者は疑念を

抱いている。著者自身も認めている様に、荀子は「次第に忘れ去られていく」(頁二七四)。しかもその趨勢は、『史記』礼書が孔子に仮託した様に、武帝時代には既に始まっているかに見受けられるのである。もとより漢代における『荀子』研究は本書の検討の埒外にある。これらの問題については、著者の今後の研究成果に期待したい。

以上、本稿では佐藤将之『荀子——礼治思想的淵源与戦国諸子之研究』について書評を試みた。評者は先秦思想研究については門外漢である。また、評者の能力不足により簡単な紹介に終始したが、本書評をきっかけとしてより多くの日本の専家が本書を手に取り、より深い學術的議論が生じる事を期して筆を擱く事にした。

(国立台湾大学出版中心、二〇一三年一二月刊、本文三五頁、新台幣三五〇元)

注

- (1) 最も早い期刊論文としては、「中国古代「変化」觀念之演變 暨其思想意義」(『政大中文學報』第三期、二〇〇五年六月、頁五一〜八六)がある。その後、「戦国時代「誠」概念的形成 与意義…以《孟子》、《莊子》、《呂氏春秋》为中心」(『清華學報』第三十五卷第二期、二〇〇五年十二月、頁二一五〜二四四)・

- 「国家社稷存亡之道德」春秋、戦国早期「忠」和「忠信」概念之意義」〔清華學報〕第三十七卷第一期、二〇〇七年六月、頁一～三三三）。「荀子哲學研究之解構與建構」以中日學者之嘗試與「誠」概念之探討為線索」（國立台灣大學哲學論評）第三十四期、二〇〇七年一月、頁八七～一二八）。「作為共生理念之基礎價值的荀子「礼」概念」（『共生の哲学のために』第十三号、二〇〇九年六月、頁二三～四一）。「戦国中晩期「忠」觀念之演變與軋折暨其思想意義」（『中央大學人文學報』第三十九期、二〇〇九年七月、頁五五～九八）。「荀子」《呂氏春秋》「忠」論和「忠信」論之展開及其思想意義」（『清華學報』第三十九卷第三期、二〇〇九年九月、頁四七三～五〇四）。「掌握變化的道德——《荀子》「誠」概念的結構」（『漢學研究』第二十七卷第四期、二〇〇九年二月、頁三五～六〇）。「戦国時代「忠信」概念的発展与王道思想の成立」（『中国哲学与文化』第六期、二〇〇九年二月、頁一八一～二〇〇）。「戦国早期の「非語言」統治思想以及其「誠」概念之結合」（『政治科学論叢』第四十三期、二〇一〇年三月、頁五三～八二）等を発表している。
- (2) 佐藤将之「中国古代的「忠」論研究」（国立台湾大学出版中心、二〇一〇年三月）。
- (3) Masayuki Sato, 2001.5, *Confucian State and Society of Li: A Study on the Political Thought of Xun Zi*, Doctoral Dissertation, Sinological Institute, Leiden University.
- (4) Masayuki Sato, 2003.5, *The Confucian Quest for Order: The Origin and Formation of Xun Zi's Political Thought*, Leiden Brill.
- (5) 佐藤将之「日本二十世紀荀子研究的回顧」（『国立政治大学哲学學報』國際荀子研究專号）第十一期、二〇〇三年二月、頁三九～八四）、後に韓国語版が鄭宰相訳「20世紀日本荀子研究回顧（I）」（『오늘의 동양사상（今日東洋思想）』第十五期、二〇〇六年一月、頁二四七～二七五）及び「20世紀日本荀子研究回顧（II）」（『오늘의 동양사상（今日東洋思想）』第十六期、二〇〇七年一月、頁二七五～三〇二）として出版されている。また、この方面の期刊論文として「漢學与哲学之邂逅——明治時期日本學者之《荀子》研究」（『漢學研究集刊』第三期、二〇〇六年二月、頁一五三～一八二）がある。
- (6) 佐藤将之「日本近代墨學研究之崛起与中日學者之墨荀思想關係論探析」（『人文論叢』武漢大學中國傳統文化研究中心、二〇一〇年二月、頁三五～二五八）、「建構体系」与「文獻解構」之間——近代日本學者之《中庸》思想研究」（『政大中文學報』第十六期、二〇一一年二月、頁四三～八五）、「雜家」和「綜合」之思想意義——中日學者对《呂氏春秋》与《呂》——《荀》關係之研究評述」（『漢學研究集刊』第十七期、二〇一三年二月、頁六一～九〇）がある。
- (7) 各章の初出については以下の通り。但し本書は著者本人が

自序で述べている様に、下記の成果をそのまま収録した「論文集」では無い事を付言しておく。

○導論及結論：『荀子』「礼治論」的思想特質暨歴史定位」（『邯郸学院学报』第二二卷第四期、頁五七～六八）、英語版は「Li as a Way to Order: The Intellectual Characteristics and Historical Role of Xun Zi's Theory of Li, "Social Sciences in China, Vol. 35.1, 2014, pp.136-145.

○第一章：“The Idea to Rule the World: The Mohist Impact of “Jian 兼” on the Xunzi.” *Oriens Extremus*, No. 48, 2009, pp. 21-54.

○第二章：「天人之間的帝王——《莊子》和《荀子》的「道德」觀念探析」（『漢学研究』第三二卷第一期、二〇一三年三月、頁一～三五）。

○第三章：「民之不牧者、非吾民也」：《管子》「經言」的礼論与《荀子》的礼治論」（『政治科学論叢』第五七期、二〇一三年九月、頁三五～六八）。

○第四章：「上以礼神明」：《管子·君臣》与《荀子》之礼治思想」（『中央大学人文学报』第五三期、二〇一三年一月、頁一～三九）。

○第五章：「統貫宇宙・自然・人的原理」：《呂氏春秋》的「理」和「理義」概念探析」（『東亜觀念史集刊』（二〇一三年二月）及び「呈現人類文明的秩序」：《荀子》「理」概念探析」（『輔仁

大学哲学論集』第四六期、二〇一三年十二月、頁一九～四六）。

○第六章：“Studies of the Han Feizi in China, Taiwan, and Japan.” Paul R. Goldin (ed.) *Dao Companion to the Philosophy of Han Fei*. Springer, 2012, pp.257-281.